科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２６　年　　６　月　２３　日現在

機関番号：　１７３０１
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2011～2013
課題番号：　２３５２０６０４

研究課題名（和文）埋め込み構造の統語形式

研究課題名（英文）the syntax of embedded structures

研究代表者
廣江　顕（HIROE, Akira）

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：２０３６９１１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円、（間接経費）　　450,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主節の選択特性により決定されると考えられてきた補文構造が、直接引用文(direct quote:DQ)と自由間接話法(free indirect speech:FIS)の場合に限り、主節動詞あるいは主節動詞を含む述部の選択特性とは無関係にDQとFISを付加部として結合可能であることを示した。また、その結合様式は「裸埋め込み(bare-embedding:BE)」という統語操作によって構築が可能であるとの主張を行った。また、BEによって埋め込まれた補文の文法特性として、主節とは異なる発話の力が埋め込まれるとの主張を行った。

研究成果の概要（英文）：This research aims at exploring a syntax-pragmatics interface, focusing in particular on the embedded structures in direct quotes(DQ) and free indirect speech (FIS). More specifically, DQs and FIS have no selectional relations with the putatively selecting matrix verbs or matrix predicates which include the verbs. In other words, DQs and FIS are syntactic adjuncts. They can be embedded by a syntactic operation "bare-embedding" in such a way to create a different illocutionary force in the complement sentences from that of matrix verbs or predicates.

研究分野：　英語学

科研費の分科・細目：　言語学・英語学

キーワード：　bare-embedding　illocutionary force

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、生成文法の理論的研究においては、LF/PF インターフェイス特性を解明しようとする試みが盛んに行われていたのと同時に、文法がインターフェイスに最適解を与えるという作業仮説のもとで、経験的事実が理論的に考察されていた。しかしながら、上位構造に下位構造を埋め込む方法やその埋め込みによって生じる文法特性等の解明はほとんどなされておらず、埋め込み構造に発話行為(speech act)という、従来、語用論に属する領域で扱われていたものが関わっているという認識はなかった。

また、直接引用文や自由間接話法（あるいは描出話法）という、言わば従属文と考えられてきたものに発話行為が関わっているという省察もなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、一般に埋め込み構造において、発話行為が関わっているという、これまでとは異なる全く新しい考えのもと、主節に選択されていると考えられていた補文が実はそうではなく、選択関係とは異なる結合様式で主節と補文が結ばれており、その結合様式を統語的文脈で定義することである。さらに、同様の結合様式が ad hoc なものではなく、文法操作のひとつとしてどのみち必要な操作であることを示し、その操作によって主節とは異なる発話の力(illocutionary force)が埋め込み節に発生することも目的のひとつである。こうした試みにより、統語論と語用論のインターフェイスの一端を解明する大きな目的の第一歩にもなる。

３．研究の方法

研究方法は、言語事実として直接引用文と自由間接話法を扱った。まず直接引用文と自由間接話法が生成文法の理論的研究の枠組みで如何なる問題との関連で捉えられてきたかを、先行研究の文献にあたることでまとめ、そこで提示されてきたデータ及び分析を整理し検証を行った。自由間接話法については、ほとんど研究の俎上に上ったことがなく、その意味で自由間接話法からなる補文がどの程度主節動詞あるいは主節動詞を含む主節述部に従属化しているのか、言い換えれば、どの程度埋め込まれているのかを、時制の一致、人称代名詞の変換といった特徴を足掛かりとして調査を行った。その際、データに関しては、常時、母語話者として鋭い直観を持ちかつ内省することが可能なインフォーマント、モンタナ大学教授 Judith Rabinovitch、長崎大学准教授 Pino Cutrone、William Collins 氏、尚絅大学講師 Josh Norman 氏、崇城大学講師 Tracy Franz 氏に文法性の判断を改めて行ってもらい再検証し、新しい事実を発掘した。そうした再検証及び新しい事実の発見をもとに、従来の理論の不備を指摘し、新しい理論的装置の提案を行った。

４．研究成果

本研究は、廣江(2012a)で直接引用文(direct quote: DQ)の文法特性に関する先行研究を検証した折、DQ は他動詞に選択される目的語（項）であり、phi 素性は持つが格素性を持たない名詞表現であるとする Collins (1997)の基本的仮説に疑義を持ったところから出発した。DQ 構文に関する事実を広範囲にわたって検証した結果、他動詞以外の動詞でも DQ 構文に生じるものもあり、さらに DQ を選択する動詞に固有な引用・報告といった意味特性を有さない動詞も、以下(1)で例示されているように、DQ 構文で観察される事実を発見した。そこで、廣江(2012)では、DQ は項ではなく付加詞節を構成しているとの提案を行った。

(1)　a.　This guy saw me walking by with a cigarette and he went “Hey, you got one?”

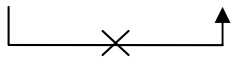
b.　“And then, in 1967, we saw the start of the plumbing problem--” droned my uncle.

廣江(2012a)で提案した、DQ は主節に選択されていない付加詞節である、との主張を拡大すれば、従属節のように見えながら、主節に選択されていない埋め込み文であるという統語的特徴から main clause phenomena (MCP)が観察されるのではないかということが予測され(cf. Heycook (2006))、その検証を行った。DQ 構文の DQ は、統語的に独立文と同じ統語環境下にあるという、私の知る限り、生成文法家たちがこれまで誰一人として疑ったことのない通説とは異なる操作、あるいはメカニズムによって埋め込まれているのではないか、との着想を得、そう考えれば、その操作が ad hoc なものであってはならず、他にも同様の操作で埋め込まれた統語構造が英語には存在するのではないか、という研究の方向性が開けた。Hiroe (2012b)で、「自由間接話法(free indirect speech)」あるいは「描出話法(representational speech:RS)」の埋め込み文が、DQ と同じタイプの埋め込み文であるとの示唆を行ったが、その統語的な埋め込み構造の特徴など、まだまだ解明されていない点も多く、その点は課題として残った。

また、DQ が選択されていない付加詞節を構成しているとの提案は、その理論的帰結として、DQ は名詞表現とする Collins (1997)の仮説は誤りとする根拠になる。英語にその証拠となる事実を求めても可能性は低いと考え、通言語的な比較に事実を求めた結果、現時点では、日本語と韓国語のように、「と」（あるいは「って」）や라고 (rago)（あるいは하고 (hago)）という引用マーカーを DQ 構文に語彙として持つ言語との比較・検討を行ったが、検証されるべき課題がこの点ではまだ数多く残っている。

本研究においてより重要だったのは、DQ 及び RS という環境で埋め込まれた時制文に共通した特徴と考えられるものは何か、ということであった。DQ 及び RS 埋め込み文の構造は、概略、以下のようになる。

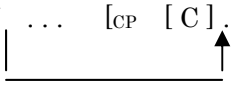
(2) . . . V . . .　　[XP　. . .]



No selection

DQ と RS という(2)のような環境で共通に関わっているものこそ発話行為ではないか、というのが本研究の最も重要な研究テーマであった。DQ の場合、Chomsky (1995)以来、ミニマリスト・プログラムで一貫して想定されている文法モデルを仮定すれば、統語部門(narrow syntax)で埋め込み文が引用文かそうでないかを区別されることはない。その区別は、LF インターフェイスの外側の、語用論部門との接点（運用体系）に至って初めて意味を持ちうる。一方、RS というのは、「自由間接話法(free indirect speech)」という別称が示すように、統語部門で指標の変換や時制の一致が部分的に（あるいは自由に）起こる文法形式である。統語部門において、指標の変換や時制の一致操作が完全な形で起こった場合は、間接話法となる。間接話法とは、(2)とは対照的に、(3)のようなスキーマとなる。(3)のような環境では、主節とは異なる発話行為を従属節に埋め込むことはできないとこれまで考えられてきた（命令文が従属節には埋め込めないとする論考に関しては、Han (1998) , Hiroe (2010), Palmer (1986, 2001), Sadock and Zwicky (1985)を参照)。

(3)　. . .　V　. . .　[CP　[C] . . .　]



Selection

というのも、間接話法を発話行為という観点から捉えれば、補文化辞を介して従属節を主節の発話行為に合成する文法形式とみなすことができるからである。その一方で、補文化辞を介在しない、つまり、補文化辞のない（主節に選択されない）埋め込み節では主節の発話行為に合成されることはない。後者の環境で主節現象が観察されることをすでに指摘し、主節とは異なる発話行為が埋め込まれている証拠だとの示唆は行ったが（廣江(2014))、まだ解明されていない点が数多く残されていると言ってよい。(ただし、He asked, “Who did you meet on the street?”のような例で誤解が生じることがある。というのも、伝達動詞が ask であることから、DQ の C0 の[+Q]素性は ask に選択されたものではないかとの疑問が生じるが、あくまで DQ 中の C0 は主節に選択されたものではないと考えている点に注意。)

こうした問題は、発話行為という意味範疇が統語的な埋め込みの対象，言い換えれば，統語部門の操作となるかどうかという研究者の間でも論争の的になっている問題と密接に関係している。主節とは異なる発話行為の埋め込みがある特定の場合において可能であり、その際、「裸埋め込み bare-embedding」」という統語操作を新たに提案することで、本研究期間内で原理的な説明を与えた。

残された課題としては、主節とは異なる発話行為が埋め込まれる統語現象は、英語の場合、これまでの研究では極めて限られると言ってよいが、一方で、例えば富岡(2010)が主張しているように、日本語の対照主題(contrastive topics)は発話行為レベルの現象であり、対照主題を含む埋め込み文は発話行為が埋め込まれていると言えるのかもしれないし、また、発話行為の接続も、英語とは異なり、日本語では比較的自由にできる(cf. Krifka (2001))ことから同様の主張が可能かもしれない。ただし、発話行為を担う要素の埋め込みに関し、まだ限られた事実でしか議論が行われておらず、一口に埋め込まれていると言っても、埋め込み文が従属節か直接引用文かどうかを判別する文法的判断基準が、日本語では明確に確立されているわけでもない(この点(blended discourse)に関しては、Kuno (1973)を参照)。いずれにせよ、発話行為の埋め込みという問題に関し、どのような文法形式に発話行為レベルの構造(speech act phrase)があると考えるのか（発話行為に関する構造の数少ない論考に関しては、富岡(2010)や Speas and Tenny (2003)を参照)、広範囲の事実を観察し理論的考察を行うことで特定したい。それから、英語では発話行為が埋め込まれる現象がこれまでごく僅かな文法形式に限られたのに対し、日本語では従属節に発話行為を表す助詞または活用形が使われることを考慮すれば、もっとさまざまな現象で観察されることが予想される。英語と日本語という異なる言語間の違いを、どのような点から導けるのかも併せて残された課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

[1] Hiroe, Akira (2013) “Embedding of bare tensed sentences”, Proceedings of the 2013 International Conference on English Linguistics, 113-116. 査読付

[2] 廣江　顕 (2012)「直接引用文の埋め込みに関する覚書」『尚絅学園研究紀要 A』, 人文・社会科学編，第 6 号，99-108. 査読付

〔学会発表〕（計 2 件）

[1] Hiroe, Akira (2013) “Embedding of bare tensed sentences”, Proceedings of the 2013 International Conference on English Linguistics, Korea University, Seoul, South Korea. July 4th 2013

[2] 廣江　顕「直接引用文の埋め込み」, 日本英文学会九州支部会第 65 回大会シンポジウム, 九州産業大学. 平成 22 年 10 月 27 日

〔図書〕（計 2 件）

[1] 廣江　顕 (2014)「直接引用文の埋め込み」『福岡言語学会 40 周年記念論文集』, 大橋・他編, 九州大学出版会, 203-215.査読付

[2] Hiroe, Akira (2012) “Modal Asymmetry”,『ことばとこころの探求』, 大橋・他編, 開拓社, 106-118. 査読付

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）
〔その他〕
ホームページ等:
http://www.cls-nagasaki.jp/member-introduction/akira-hiroe/

６．研究組織
(1)研究代表者
廣江　顕（HIROE, Akira）
長崎大学・言語教育研究センター・教授
研究者番号：20369199